２１世紀の日本のかたち（８）
--- ネットワーク社会 ＜その２＞ ---

戸沼幸市
＜(財)日本開発構想研究所 理事長＞

３．下から上へ

先日、「都市観光」をテーマに、ソウルで開かれた韓国、中国、日本合同のシンポジウムに参加する機会がありました。漢字文化圏における国際都市観光のあり方を探るというものでした。事前の打合せはメールで、当日のシンポジウムは三国交流史を記録した大きな歴史地図を広げ、映像情報を多用し、異文化・情報・観光をキーワードに活発に意見交換を行いました。ソウルは羽田空港から航空機でほんの２時間の距離です。

シンポジウムの期間、筆者の宿泊ホテルは、ソウル市庁舎前広場の一角にあり、大統領府、青瓦台も遠望できました。その夜、ふと、市庁舎前広場をホテルの窓越しに見下ろすと、点々と人々が集まりだし、やがて群衆となり、広場は人でいっぱいになりました。ちょうど李明博大統領がアメリカ産ＢＳＥ牛肉の輸入をアメリカ大統領に約束した直後で、それに対する抗議集会だったようです。若者達が映像付きのケイタイで連絡を取り、マスメディアとつながり、大集合となったのです。大統領は方針を変えざるを得ませんでした。ソウルの友人の説明では、ケイタイネットワークは、政治面で爆発的な影響をもち出し、今回、前回と大統領選の結果をも左右したとのことでした。

韓国は伝統的に儒教の国であり、権威、権力を尊重し、家族、親族、地縁社会、国家と上から下への統治、タテ社会の色彩の強い国でした。これがあっという間の下からの動き、ヨコつなぎされた下の力で情況の変わる情報ネットワーク社会になりました。また、国策として、高度情報化社会をめざしています。

２１世紀初頭、日本においても下から上へ、タテからヨコへ、ピラミッドからネットワーク・網の目へ、社会構造が大きく変質しつつあります。家族、家業、地域社会、共同体、企業、国家のピラミッド構造に下からの力の働き、ヨコ型の網状構造になりつつあります。

４．タテからヨコへ

最近の情報社会の進展は、「誰でも・いつでも・どこでも・何でも」、公的情報を含め必要な情報をやすやすと手に入れるユビキタス・ネットワークへと向かっています。

マスメディア（ＴＶ、新聞、雑誌など）は、下から掬って多様な情報を間断なく社会に注ぎつづけ、加えて、パソコンやケイタイ、メール、インターネットは、個人と個人をつなげる双方向の情報伝達手段として、オープンな場での自己表現を可能にしています。

インターネットは、友人、知人、一定の関心を

持つ見知らぬ人同志の会話網、連絡網として、日常的に活用されていますが、これが何かのきっかけによって、一つの大きな力を発揮します。

生活者の個々は地べたにあって等身大であり、場所に住むリアリティを持っています。地域社会における日常生活の問題をすくい上げるセーフティネットの基本は、この等身大の個人のヨコつなぎのフェイス・ツー・フェイスの連絡網が基底にあり、そこにフットワークの良いＮＰＯ、ＮＧＯといった新たな「公」が生み出されています。政府や地方政府に対して、地べた、下から問題提起をしつつ、自助自立を含んで事態の解決を試みています。

国政といったスケールにおいて、日本は平和と文化の国をめざして戦後民主主義体制をつくり、２０世紀後半、経済的繁栄を築き上げて来ました。

これに加えて、進展する個を横つなぎするネットワーク社会は、より直接民主制の色合いを強めつつあると考えられます。

下から上へ、タテからヨコへの情報伝達回路が大きな意味を持ち出したのです。

市民、国民の意向、世論は、発達したマスメディアによって、瞬時に集められ、世論として、議会や政府にぶつけられます。政府は情報公開により、絶えずオープンな運営が求められます。

全ての公的組織は、閉鎖系から開放系へと移行してゆくことが要求されます。

国政、地方政治の頂点にある総理大臣、首長も代議員も、権威者、権力者というよりも共同体の御用聞き、コーディネーターといった役回りとなっています。

政治も世論の動向に大きく左右され、時に民衆に迎合する場面も多々あります。世論は長期的問題への反応よりも、短期問題への反応に傾きがです。この点で、政治は時々の世論に迎合するポピュリズムに陥る危険もあります。情報ネットワーク社会は、ある意味では究極の責任者の見えない不安定構造に移行しているという見方もできます。

生活者個人が必要とする情報は、必ずしも多いものとは思えず、共同体、地域社会における安全と安心、災害などに関するもの、自己実現、自分の楽しみに関するもの、これに係る国の動き、世界の動きです。この点で現代のメディア情報は、個人にとっては巨大な「ノイズ」ともいえます。

情報ネットワーク社会における人々の政治行動は、特徴として無党派的です。政党支持も絶対的というよりは、相対的なものに思えます。下から上へ、タテからヨコへの力の強いネットワーク社会において、リアリティを持った原情報に立脚した住民、市民側の力量が改めて試される時代になりました。

（2008 年 8 月 15 日）